



文部省  
生涯学習局長  
齋藤 諱淳

# 豊かで気 生涯学習

## 生涯学習社会とは

**柳川** 現在の我が国はたいへん豊かな時代にあると思います。そんな中で、いよいよ生涯学習時代の到来と言われておりますが、齋藤局長は臨教審以来、この問題にたずさわってこられたわけで、先ず、文部省としては生涯学習社会をどう考えているか。

**齋藤** 生涯学習社会というと、誰でもいつでもどこでも学べるような社会と言われますけれど、実はそれだけではないわけです。

それは何かと申しますと、三つありまして、一つはあまりにも学校に頼りすぎであるという、学校中心主義——これが偏差値一辺倒の人間を作ったり、或いは入試の成績で人間を判断してしまう。そう言う考え方から脱却しなくてはならない。これが第一点です。

それから、二番目は何かというと、これはいわゆる成熟社会で、余暇時間が増えたとか、高齢化したとか、婦人の関心が非常に高まっているとか、あるいはカルチャーセンターが発達しているとか、そういう、いわゆる成熟社会。

三番目は何かというと、情報化とか、科学技術とか、国際化などでですけど、要するに世の中が非常に専門化している。専門化しているから、いわゆる若い間の学校教育だけでなく、いわゆる「リカレント教育」といまして、学校と成人してからの教育をたえず交流していく必要があると思います。

**柳川** そう——生涯学習社会の展望というのは、従来の学校中心の考え方から脱却して、それからまた豊かな社会になって、さらにそれに対応していくという、そういう教育のあり方、それが生涯学習社会だと思いますね。

**齋藤** 文部省がこれから生涯学習をやるとすれば、その展望をきっちり抑えておく必要があるんじゃないかと思いません。

**柳川** 臨教審でも豊かな社会と、それに対応していく教育のあり方をするべく指摘しておりますけれど、これからの文部行政の役割というものは大変なものですね。

**齋藤** 文部省は今まであまりにも学校だけに向きすぎていたんです。学校だけに向きすぎる教育というのは、他の各省は全然関係のないことですから、非常に内向きなんです。内向きでそういう仕事をやっている、他の生涯学習のいろんな機会というのはほとんど増えているわけですから、幅広く文部省の役割というものを変えていかなくてはならないわけです。その変えていくそのキーがやはりこれから生れる生涯学習局にあると思いますね。

もともと生涯学習局ということになると、学校教育は全然やらなくなってしまうのかとか、およそ偏差値とか、入試とか、そういうことが無意味なことかという、決して無意味ではなしに、それはそれで一定の意味があるし、

非常に重要視しなければならない。しかし、同時にそれだけにあまりにも固執していると、文部省が非常に閉鎖的になって、守備範囲も小さくなっていくということです。だから、文部省の役割を内向きから外向きにどんどん変えていくというのがこれからの一番大きな仕事だと思いますね。

## 生涯学習局の発足

**柳川** その辺の認識は大事なことでしょ。7月ですか、生涯学習局の発足は。

**齋藤** 予定としては、7月1日に生涯学習局が発足し、また、各都道府県には生涯学習の推進会議を作るようになると思います。

**柳川** これからは青少年にしても、学校教育だけでなしに、いわゆるアドベンチャー事業をしたり、野外活動をさせたり、あるいはグループ活動をさせたり、非常に幅広くやっていかなくてはならない。そうでないと、子供自身が本当に伸びやかなたくましい子供に育っていかない。

それから、成人教育も、単に従来の婦人学級や家庭教育学級だけではなしに、いろんな職業婦人をどういうふうにとらまえてゆくかとか、そういう意味で、職業訓練とどう関係つけていくか。それから、もう一つは、民間の教育産業がどんどん伸びてくるでしょうから、それとどう連携を図っていくか、そういうことで、非常に幅広くやっていかなくてはならないですね。

**齋藤** そうですね。学校教育の場合には学校の資格を与えるとか、あるいは大学で言えば認可をして、そういう法人の活動を許してやるとか、こういうことをやっていたんですけど、生涯学習というのは、そんなに上から許可をすとか、規制をすとか、基準を決めるとか、そんなことではないんですね。いかにしてそれぞれの力を発揮してもらうかという、そのことで、いわゆる規制行政から推進促進行政に転換していかなくちゃならないというのが一つの戦略として非常に大きいんだと思います。だから、そういう意味で、「さわやか行政」ではないけど、文部省の仕事もよほどさわやかにやっていかなくてはならない。

それと、もう一つは、単に文部省の内向きの仕事をするのではなしに、大臣からもよく言われているんですけど、要するに各省ととにかく裸足で稼ぎ廻れと、こういうふうに言われているんですけど。それをやらなくてはならない、こういうふうにいるんですけどね。

いまそれぞれの各省が何らかの形で人間の学習につながる、そういうようなことをいろいろやっていますから、それとどう連携をとっていくかというのがこれからの文部省のやり方として一番大事なことだと思うんですね。それが生涯学習の戦略といえますかね。

# 高い民族 時代を語る

当協会副会長  
参議院議員

柳川 覺治



## 成長型から成熟型へ

柳川 明治以降、我々は近代化を目指して、とにかく欧米諸国に追いつくことだけを考えてきた。そのためには生産力を上げ、教育水準を上げることを最大の目標にしてきたわけですが、反面、この百年間の学校教育を中心とする駆け足行進に反省も出てきた。

● 齋藤 はい。そういう駆け足行進をしていると、それこそジャパンパッシングじゃないけど、とにかく働きすぎだ、勉強しすぎだ、それから遊ばなさすぎるんだ、物を作りすぎだと言われる。そういう意味では世界史的な観点から見ると、生涯学習局へ転換していくというのは、そういう世界史的な日本の地位というものでしょうか。それは一口に言えば成長型から成熟型へと、こういうことだろうと思えます。

柳川 いわゆるエイジレス・ソサエティと申しますか、高齢化社会での生涯教育も重要な問題になりますね。

● 齋藤 老人の生き甲斐だけではなく、やはり世の中がこれだけ変化がはげしくなりますと、高齢者が伝統を伝えていくという非常に大きな積極的な役割があるもんですから、そのへんは社会教育などで老人ができるだけ積極的にがんばっていただきたいと思っているんですけど。

それこそ柳川先生がやっておられる「ゲートボール」なんかは非常にけっこうなことだと思いますけど、そういう意味でスポーツに老人がずいぶん参加するようになったと思いますけど。

● 柳川 私はね、前々からいろいろな学習施設を大いに開放して、生涯学習に役立たせるべきだと唱えてきたんですが、それと、昨年アメリカのインテリジェント施設を見てきたんですが、学習施設のインテリジェント化も大いに推進されるべきでしょうね。

● 齋藤 おっしゃるとおりですね。

ですから、学校の空き教室とか、あるいは体育館とか、特別教室というのは世の中全体が使うように——インテリジェント化というのはそういう意味だと思いますが。

施設を使うだけではなく、人もできるだけボランティアで高齢者が入ってきててもやれるように。だから、人も施設もそれぞれネットワークを組んでこれからやっていく必要があるんじゃないかと思えます。

それから、一つの施設は一つの機能しか持っていないというのは、それはあまりインテリジェントじゃないんだということですね。

だから、一つのプールを昼間は学校で使って、夜は社会へ開放するとか、運動場もそういうふうに垣根を取り払ってしまつて、公園と運動場をいっしょにしてしまつとか、そういうふうに非常に機能的にネットワークを組みながら有効に使っていくというのが、それがまたインテリジェン

トの考え方です。このインテリジェントの考え方というのはそういう施設だけを言っているのかというと、そういうことではなしに、それはまさに生涯学習の考え方なんですね。

## 豊かで気高い民族を目指して

● 柳川 日本は大変な国になりましたね。それだけに、国際的に果たす役割がますます大きくなる。生涯学習時代の到来は、こういうことと決して無縁ではないと思えますね。

● 齋藤 生涯学習局が成功するかしないかは、言いかえれば、ジャパンパッシングで日本たまたきに遭っている我が国を国際社会にどう転換していくかということにもなると思えます。

だから、一、文部省の仕事ではないと思うんですね。政府の政策はもちろん国民も含めた日本全体の問題だと思えますね。

● 柳川 これは我々日本人が生き残っていくための、また世界で飛躍するための基本姿勢だと思うんですね。そして、豊かになった日本人が、今後どう歩むべきか。エコノミックアニマルと言われた我々は、今こそ、豊かで気高い民族を目指すべきだと思いますね。

それには生涯学習社会の確立が極めて大きな意味を持つてくと思います。

● 齋藤 たえず経済なり生活というのは向上し、成長していかなくてはならないと思えますけれど、あまりにも一方的にどんだん特急のように走り抜けていくというのは、それは摩擦が大きすぎるんじゃないか、だから、成長しなくてはならないということと、速さがどうかということを考えていかなきゃ世の中の秩序を乱してしまう。それこそ国際的に反感を持たれますね。

まさに国際的に反感を持たれないようにするには、政府全体がそういう気持ちにならなくては、政府をしてそういう気持ちになさせるためには文部省ががんばらなくては行けない。文部省ががんばるためにはやっぱり生涯学習局ががんばらなくてはならない。そんな構図だと、こういうふうに思えますね。

● 柳川 そう。そういう大きな夢のようなものが是非欲しいですね。

● 齋藤 生涯学習社会の到来は何か21世紀に向けてまさに虹を架けるような話だろうと私は思っているんですけどね。

● 柳川 どうもありがとうございます。

(教育・科学・文化・スポーツの総合情報誌：  
エゼックス第8号より転載)